

2022年度
【修士課程】 専門科目

早稲田大学大学院文学研究科
文化人類学 コース

入学試験問題
※解答は別紙（縦・横書）

I. 次の文章は、「分ける」という人の行動が LCA (Last Common Ancestor 最終共通祖先) に由来するチンパンジーやボノボと共通する基盤をもつこと等について論じたものの一部を抜粋したものである。文章をよく読み、以下の設問に答えなさい。

狩猟採集民ではそれぞれの集団ごとの慣習にしたがってシェアリングがおこなわれるが、その都度、個人間のバランスシートを考慮した形でシェアリングがおこなわれているところはない。たとえば肉のシェアリングに参与する者が優秀なハンターだけといったことはあり得ない。高齢者、子ども、女性、身体の不自由な人など、一方的にもらうだけの人が必ずいる。若く元気な男性でもあまり狩猟に向いていない者もいる。クン・ブッシュマンでは狩猟者のうち半分に相当する人たちが全獲物の 95% を捕獲すると言う。つまり残り半分は 5% のお返ししかできないのである (Lee 1979: 244) ^①。だからと言って、そういう人たちがシェアリングから排除されることはない。

ところで、世界各地の狩猟採集民は異口同音に、自分たちのあいだではシェアリングが当たり前のこととしておこなわれている点を強調する。アフリカ南部の極度の乾燥地で生きるブッシュマンは「分け合わないものはライオン[ブッシュマンでは悪の象徴]と同じだ」と断言し、極寒の北極圏に生きるイヌイットは「われわれはだれとでも食物を分かち合う」ということを調査者に力説する (岸上 1998) ^②。熱帯雨林のアカ・ピグミーを調査した丹野正 (1991) ^③ は、アカにとっては「個々の獲物が「だれのもの」であるかということよりもむしろ、それらは分かち合うべきものである——すなわち、われわれは互いに分かち合って当然という間柄にある——という点に力点がおかれている」と述べ、「それはキャンプを共にする（している）ということと表裏一体をなす暗黙の合意ないしは規範なのだ」と論じている。

このように狩猟採集民において常にシェアリングが強調される裏には、穿って考えるならば、そういった発言を通して、自分たちが生きる上でのシェアリングの大切さをあらためて確認し、シェアリングを損なうような行動への戒めとしているのではないだろうか。類人猿では前節で見てきたように、シェアリングの基盤は有するものの、日常的な食物の分与はないし、求めないし、求める必要もないという生き方である。一方、人は進化史のどこかで日々の安定した食物確保の必要に対応してシェアリングという相互行為が生まれ、その重要性が増すとともに、その大切さをつねに確認しなければならなくなったのである。そのターニングポイントはどこか。確かな証拠はもちろんないが、現生の人類に普遍的に見られる家族というユニットの登場と結びついている可能性は大きい (1)。

・・・中略・・・

家族について考えるにはまずその定義が必要であるが、今西錦司 (1961) ^④ が唱えた定義を基本にしたい。今西は 4 つ挙げているが、内容で整理すると次の 3 点である。①インセストの禁止とエグゾガミー（外婚＝メイト・アウト）の実行、②複数の家族を内包するコミュニティ（地域共同体）の存在、③家族内での男女の分業。この中で、インセストの禁止と外婚 (2) は人以外の霊長類でも十分に備えている。しかし地域社会と男女の分業は難関である。伊谷 (1983) ^⑤ も述べているように、人以外の霊長類社会では、多くの単位集団（群れ）は排他的輪郭をもち、相互に避けあうか敵対するものである。したがって群れを超えた地域社会の形成はきわめて困難である。③の男女の分業が生ずるためには、栄養補給をすべて自助努力で賄うといった類人猿的生活スタイルから離れる必要がある。現生の狩猟採集民では、絶対的といったものではないが、男は狩猟、女は採集活動といった生業の分化が普通である。ペアボンドを維持する男女におけるこのような生計活動の分化が成立するためには、男女間のシェアリングが日常ベースでおこなわれることが不可欠である。

人の祖先における男女の生計活動の分化と分業のきっかけとなった事情であるが、その第一はシャペ(Chapais2008)^{註6}やラブジョイ(Lovejoy2009)^{註7}が主張するように、子どもの成長の遅延と雌における養育負担の増加であった可能性は大きい。現生人の新生児は、体の大きさに比べるとその運動能力はきわめて未熟である。授乳中はおろか、離乳後も自力で行動できるようになるまではかなりの年月を必要とし、そのあいだ母親がしっかり世話をしなければならない。その期間、母親へのサポートは必須であり、パートナーとしての雄の育児参加の必要が強まったと思われる。これは進化史上きわめて重要な出来事と言えるだろう。それまでペアを保ちながらも生計的には互いにほとんど独立していた男女がはじめて子育てという共通の課題を背負ったのである。

・・・中略・・・

現世の狩猟採集民に特有の、経済的に独立した小集団であるバンド(3)は、個々の家族と同時に存在するものである。そして個人が単独では生きていけないのと同じく、家族も単体では存続し得ない。それは日々の生活の安定の他にも、近親婚を避けるという生物学的必要を満たす上でも重要である。バンドは人口がある程度増えると、分裂した方が効率よく環境の資源利用ができる。シェアリングの範囲にもある程度の適正なサイズがある。そして、そういった共通の基盤をもつバンドが、分離・分散しながらも互いの連携を保ち、地域的なコミュニティが形成される。各個人やそれぞれの家族は、親族や姻族などとの関係を保ちつづけ、さまざまな機会に他所の知己を訪ねて交流する。地域コミュニティは婚姻のための基本的な母集団となる。チンパンジーにおける性的にアクティブな異性の共有とはレベルを異にするが、マクロ的に見ればある種の共有資源としての遺伝子プールである。ペアバンドから家族への発展を導いたシェアリングの絆は、このような一連のコミュニティ拡大の連鎖の中で、一貫して重要な役割を演じてきたはずである。すなわち、人は、シェアリングというLCAからの基盤を継承・発展させながら、生態学的環境やライフヒストリーとの関連においてさまざまな有機的連携をもつ社会集団を創出し、今に見るような独自の世界を築いてきたのであろう。

最後に、所有とシェアリング、そして自由と拘束という問題について付言し、この小論を締め括りたい。ムブティピグミーやアカピグミーの調査をした丹野正(1991)は、「ウッドバーンに代表される欧米の人類学者の多くは、なぜ彼らは分配するのかという問いから出発する。そのとき人類学者は、個々人が獲得した物はとうぜん彼の「所有物」であり、彼自身（すなわち、「自由な個人」）には自らの「所有物」を他者に分け与えねばならぬ理由はないという前提に立っている。そこで、狩猟採集民の間での分配の理由を「個人」の外側に求めようとする」と批判している。

たしかに、個人が所有するさまざまな「もの」に対する「所有権」は近代社会では自明のことのよう考えられてきたが、権利とは周囲がそれを認めることによってはじめて生まれるものであり、「もの」自体に備わった固有の性質ではない。群れという集団を作って生きる霊長類では、仲間がその手に握っているものについては、おおむねその所有が尊重される。食べ物であれば、それを本人からもぎ取るとはほとんどないし、無理やり取り上げようとすればかなりの労力や争いを覚悟しなければならぬ。人の場合も同じであり、一人で入手した食物の処分についてはその人の思いが当然のこととして尊重される。しかし集団で力をあわせて入手したものは、どう考えても、だれか一人の思い通りにはなるものではないはずである。また、たとえ単独で入手したものであったとしても、シェアリングという慣習が集団として合意されており、その中で自分も生きているのであれば、それを拒否してまで独占を主張するのは無謀な企てであらう。

丹野(1991)は上記のような、ウッドバーンらが描く「自由な個人」としての狩猟採集民像を批判すると同時に、狩猟採集民は親族や姻族という社会関係の網の目につよく拘束されていると指摘し、キャンプをともにする人びとはそれぞれ親族関係の目の中に緊密に組み込まれているがゆえに、シェアリングがおこなわれるのだと主張する。

この点については少々留保したい。親族関係に拘束された生き方という見方は狩猟採集民には相応しくないと思うからである。狩猟採集民の平等主義（エガリタリアニズム）のポイントの一つが個人の移動や行動の自由である。もっとも、個人の自由といっても無制限ではなく、あくまで社会的な合意の枠中でのことである。移動の自由はいろいろな意味で狩猟採集民として重要な自由と思われる。すなわち、生態学的問題ならびに社会学的なさまざまな問題解決の手段として居住の自由、移動の選択の自由が有効に機能するからである(Terashima1985)^{註8}。

したがって親族関係に拘束されてシェアリングがあると考えるよりも、日々のシェアリングの実践こそが、親族関係という絆の価値や意味を生み出していると考えの方がよいと思う(4)。価値ある食物を前にしてチンパンジー／ボノボたちが、あれやこれやの手段を尽くしてそれを入手する交渉を試みなければならないのは、親族関係等の認知がないからではなく、日々生きるための社会性・共同性としての食物のシェアリングがさほど重要ではないからである。

チンパンジーは群の中で、他のメンバーと自由に離合集散しながら生きる自由をもつ(伊藤2015)^{註9}。そして狩猟採集民は、バンドを離れる自由と合流する自由をもち、自らの判断で暮らしやすい人々とともに生きる。それもきっとLCAから受け継いだ習性であろう。その自由を生かすべく、親族や姻族なども含めたさまざまな絆が活用されるのである。もっとも、親族関係とシェアリングのどちらが重要かという話ではないかもしれない。どちらが無くても人の生活は成り立ちえない。双方が互いに支え合うことによって人の生き方が進化したと考えるべきだろう。

註1 Lee R.B.1979. *The !Kung San: Men, Women, and Work in a Foraging Society*. Cambridge University Press.

註2 岸上伸啓(1998)『北極の民—カナダ・イヌイット』弘文堂。

註3 丹野正(1991)「＜分かち合い＞としての＜分配＞—アカ・ピグミー社会の基本的性格」田中二郎、掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社。

註4 今西錦司(1961)「人間家族の起源—プライマトロジーの立場から」『民族学研究』25(3):119-138。

註5 伊谷純一郎(1983)「家族起源論の行方」『家族史研究7』大月書店。

註6 Chapais,B.2008. *Primeval Kinship: How Pair—Bonding Gave Birth to Human Society*. Harvard University Press.

註7 Lovejoy,C.O.2009. "Reexamining human origins in light of *Ardipithecus ramidus*." *Science* 326:74-74e8.

註8 Terashima, H.1985. "Variation and composition principles of the residence group (band) of the Mbuti pygmies: Beyond a typical/atypical dichotomy." *African Study Monographs*, Supplementary Issue4:103-120.

註9 伊藤詞子(2015)「離れつつ、ともに生きるチンパンジー」『フィールドプラス』14:4-5。

設問1 下線部（1）に関して、シェアリングの重要性と家族の登場とが関係するという著者の主張とは具体的にどのようなことか、わかりやすく説明しなさい。

設問2 下線部（2）のインセストの禁止と外婚という用語について、知るところを簡潔に述べなさい。

設問3 下線部（3）新進化主義と狩猟採集民のバンド社会について、知るところを簡潔に述べなさい。

設問4 下線部（4）に関して、親族関係に拘束されてシェアリングがあるとする考え方と、シェアリングの実践が親族関係という絆の価値や意味を生み出すとする考え方とでは何が違うのか、あなた自身の考えも含めて説明しなさい。

II. 次の問題から3つ選び、選んだ問題の記号を明記して、文化人類学の立場から答えなさい。

- A. エスニシティについて、具体的な事例をあげて簡潔に論じなさい。
- B. フィールドワークをめぐる議論について、具体的な事例をあげて簡潔に論じなさい。
- C. 通過儀礼について、具体的な事例をあげて簡潔に論じなさい。
- D. 文化相対主義をめぐる問題について、具体的な事例をあげて簡潔に論じなさい。
- E. 伝統の創造について、具体的な事例をあげて簡潔に論じなさい。
- F. 開発と文化の問題について、具体的な事例をあげて簡潔に論じなさい。

III. 文化人類学コースにおいて今後どのような研究を計画しているのか、テーマおよび研究方法を具体的に述べ、主要な先行文献を書き添えなさい。句読点を含めて300字以内で記すこと。また、関連する卒業論文やゼミ論文（予定を含む）や既発表論文があれば、欄外にその題目を付記しなさい。外国語の場合は日本語訳を添えること。

愛敬齋	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

文化人類学

兵 集

—ここから記入すること—

(裏へ続く)

Lined area for writing.

(次頁へ続く)

———これより先の余白には絶対に記入しないこと———

[illegible]

(裏へ続く)

Blank lined area for writing.

———これより先の余白には絶対に記入しないこと———

